

7
2
87

繪本
實錄

宇都宮釣天井

金壽堂藏版



特 64
544

VE 83319

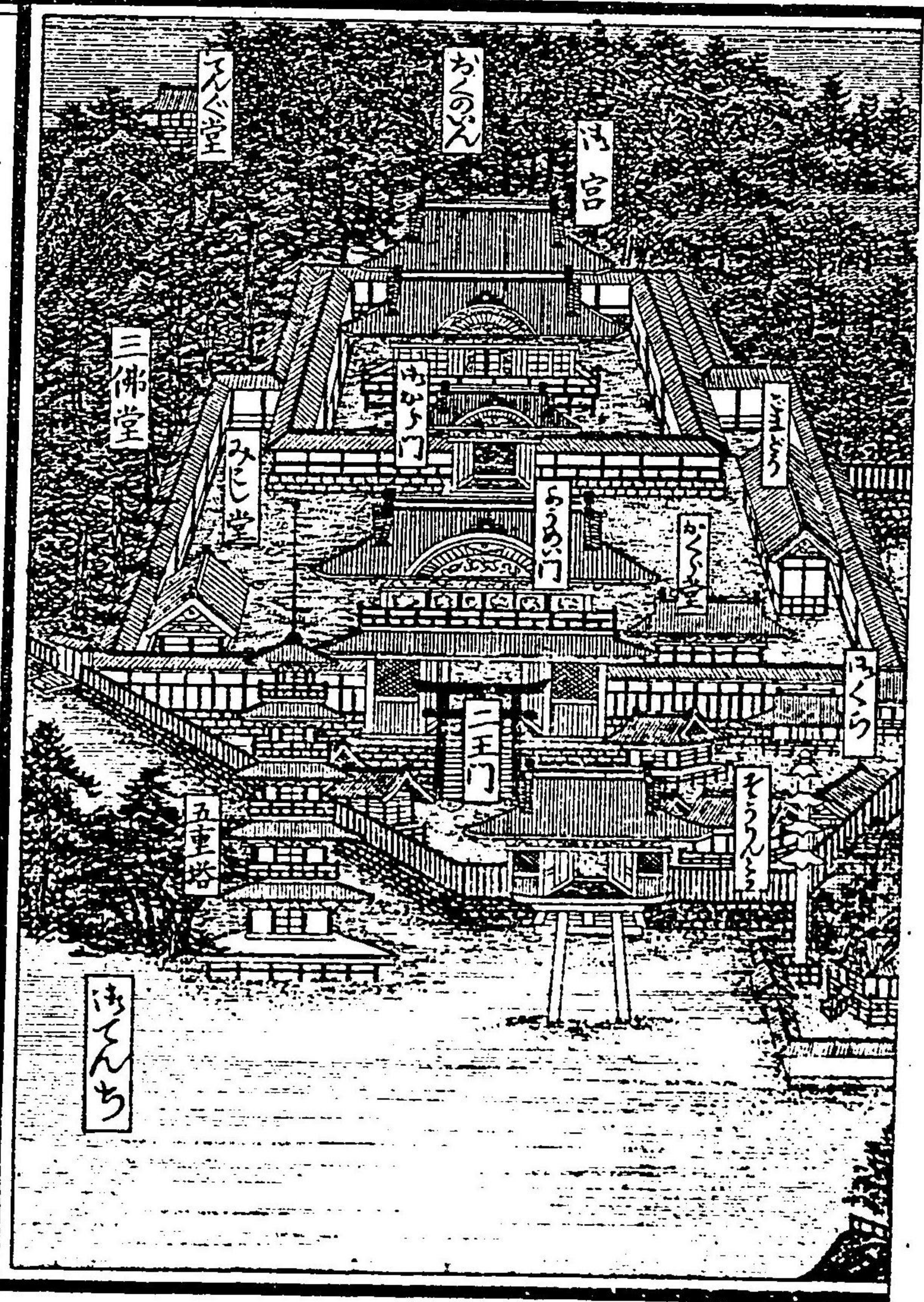








日光山全圖





綱小村雲花
 凡世事完全
 ありさうの物
 理の敷あり徳
 川家康公將
 軍職より
 四海静
 謐より上下
 万歳と唱へ在戸
 在城あり二代將軍
 秀忠公三代將軍家
 光公に至り宇都
 宮騷動あり其来



由と尋ふるひ
 公は二子あり長
 竹千代君と申夫
 日の島の腹子出
 生しめふ次の
 国松君として
 御臺所の生せ
 むみとて
 ありさ
 れが三
 代將軍
 りんめ
 国松

宇都宮



宇都宮

君を
 人々
 おへり
 家康公
 の御意
 千代君
 家督
 の入ふて浦佐の酒井
 左門尉家次主井大炊頭
 別勝安藤對馬守重信の
 三傑たり國松君あり

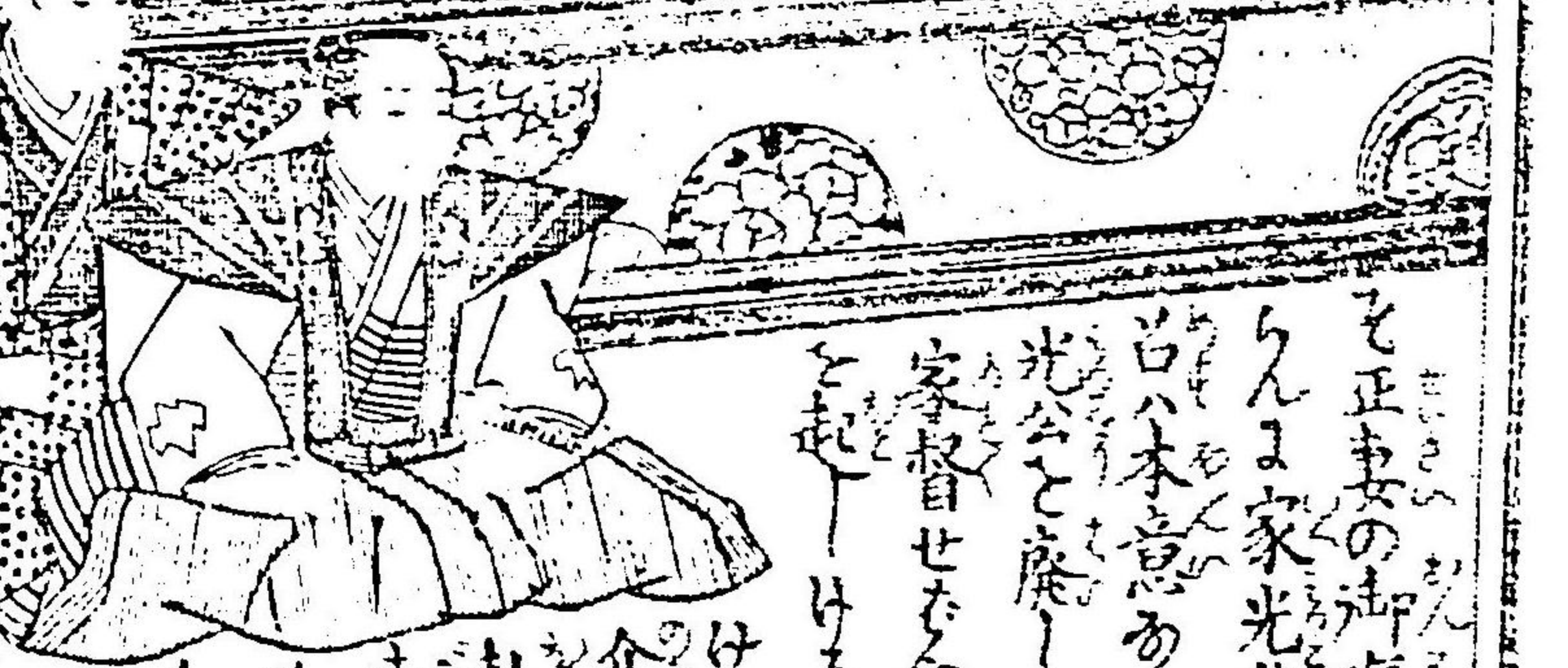


此君聰
 明
 智
 かな
 後見の雨士



本多上野介正純平
 岩主計頭
 親吉
 家光公

見
 駿府の城



正妻の御腹あり將軍と
 らん家光公御代り
 旨本意ありわ何とぞ家
 光公と廢して忠長公と御
 家督せむと不良の心
 起
 けり
 介正純は江戸へ
 赴き秀忠公の
 御機嫌と同
 ひ且秀長公の
 御奏明と賞
 讃して武將

守者

大御所の御遺言も大切の評定も我々の代の大久
 保彦左工門は相談せよとの仰せあれは彼れと仰せしと申すも
 即時申すは左工門と
 召されしは彦左工門の早
 速登城の上御前小伺候
 こころふ直孝申すは御
 も知るごとく御家督の家
 光公お御定めのお天下の大任を
 仰るる大事のよと申すは評
 議あさんと思召貴殿と御
 ゆいしゆく申すは彦左衛門
 陳るや徳川の御跡目の家光公
 と立ると天下の諸侯皆知る所



大御所もその御ころみし御世界あ
 りし事ありしより子と見えし
 親ししと申すは君の



大御所の御遺言も大切の評定も我々の代の大久
 保彦左工門は相談せよとの仰せあれは彼れと仰せしと申すも
 即時申すは左工門と
 召されしは彦左工門の早
 速登城の上御前小伺候
 こころふ直孝申すは御
 も知るごとく御家督の家
 光公お御定めのお天下の大任を
 仰るる大事のよと申すは評
 議あさんと思召貴殿と御
 ゆいしゆく申すは彦左衛門
 陳るや徳川の御跡目の家光公
 と立ると天下の諸侯皆知る所

新編 密

まゆへども大御所の御遺言も大切の評定あり必我名代の大夫
 保彦左工門は相談せよとの仰せあれが彼れと啓して御心
 しくるべしとあまふより即時不彦左工門と
 召されしは彦左工門の早
 速登城の上御前不伺候し
 こまらふ直孝申す魚て御心
 も知るごとく御家督の家
 光公御定めの時天下の大任を
 承るる大事のよしゆへに評
 議あるさんと思召貴殿と御
 めしゆゆと申せば彦左衛門
 陳るや徳川の御跡目の家光公
 と立ると天下の諸侯皆知る所
 ありしは彦左工門の早
 速登城の上御前不伺候し
 こまらふ直孝申す魚て御心
 も知るごとく御家督の家
 光公御定めの時天下の大任を
 承るる大事のよしゆへに評
 議あるさんと思召貴殿と御
 めしゆゆと申せば彦左衛門
 陳るや徳川の御跡目の家光公
 と立ると天下の諸侯皆知る所



り大御所もその御心より御心界あ
 りし事ありと子と見ること
 親しむと申せば君の

小又かば
 忠長卿
 自諸侯
 二備
 たすの
 目死
 御他



守者宮



● 津使者あり
但真途小至り
依膝の沙汰を
申さんものり
目付して駿河
よのふ付まらり



馬守此三人の
御在の際竹千代君と
將と仕立奉るべしと此者
置れり今更忠長殿御
家督とあり此三人の教導
空一きぬ家光公御家
督ある事と面目を失
ふのうら存命はまきよ
あらま是眞土への紀

新編 諸藩 御用 御用 御用



大御所御告
 知らせの御
 使者の甚
 難ありまう

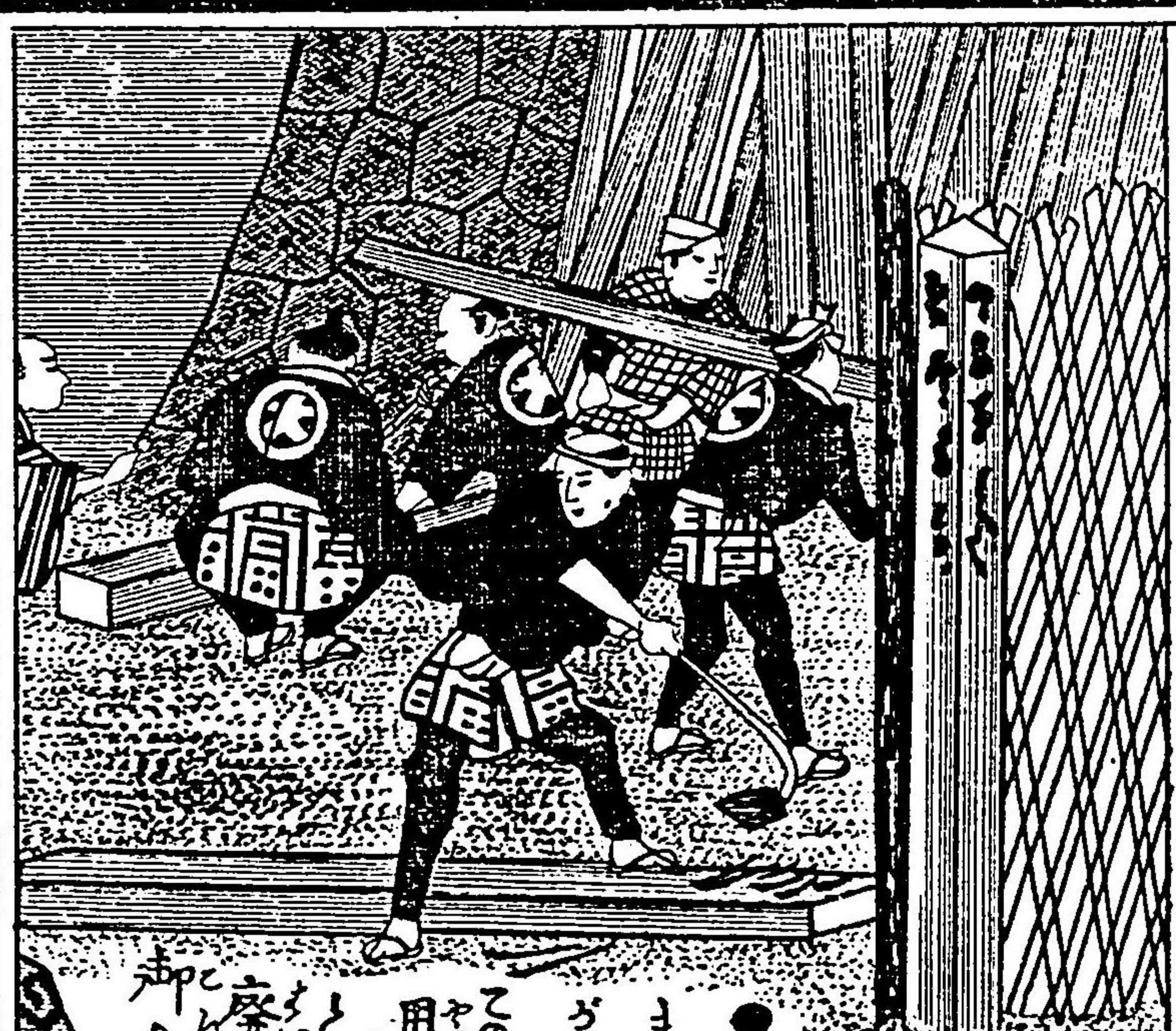
御使者の
 但真道に至り
 依怙り沙汰を
 申さんるるり
 目付として駿河
 のふ付まじり



から幸ひの者
 これありそれ
 酒井左門土井
 大炊頭安藤但
 馬守此三人の
 御在世の際竹
 将と仕立奉る
 置れり一今更
 家督とあり六
 空一きぬ家光
 督あり事と面
 目のくり存命
 あらは是眞土
 へのた

三ノ目

九

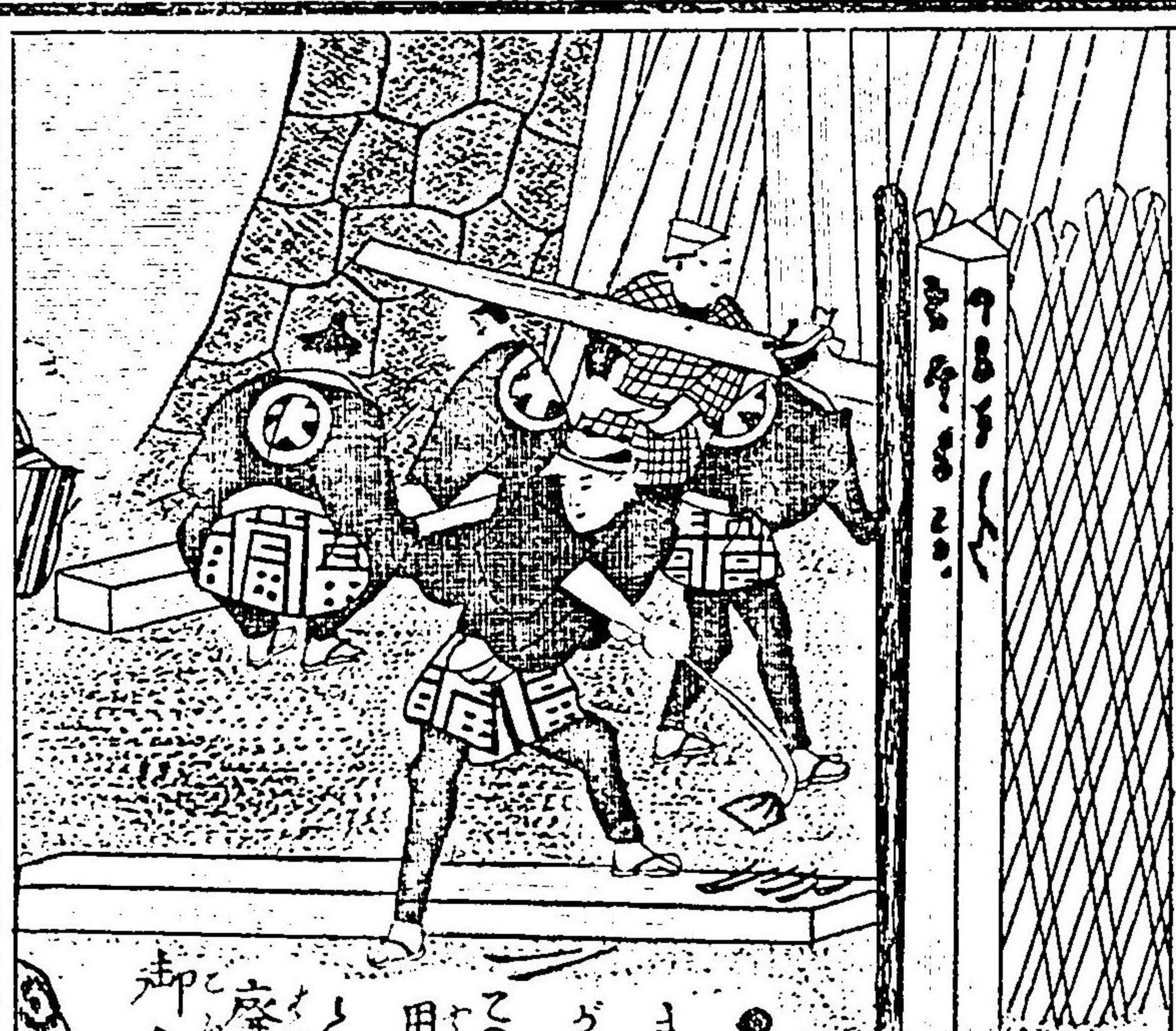


● 尤至極あり
 まが其使者
 う出来るはず
 この沙汰無
 用中
 と提より
 察嫡の
 御合

遠慮もあし申ふと
 將軍まことめされ又
 爺やがとまりりと
 うち笑を
 彦左門
 異見



又絶甲のり
 八月廿七日
 公正二位内
 同年閏八月廿七日
 井邊子両
 長者



遠慮のありし中みと
將軍きこしめされ又
命なきまのり
尤至極あり
まの其使者
が出来るまのり
この沙汰無
用みよ一
と是より
廢嫡の
御念

×絶果

とまは元和九年七月

御上洛ありて家光公正二位内

大臣ふ叙任せらるる同年閏八月廿七日

在事大將軍淳和并學子兩

院の別當源氏の長者

不任せられ

三代將軍



忠長卿
の後見本
多上野介
正純の家
光公の御
代とあり
我意の
通りぬと
残念な
めひあや
いらく謀
計とめざ
相役



●は御取
ありて慶長
十二年尾張名
古屋の城主と
あり十七万石
此度本多上野介
が為一大事な組
種々計略を
めくられける爰は
將軍家光卿ハ神
君の御厚恩を忘れ
たまらば日光へ御

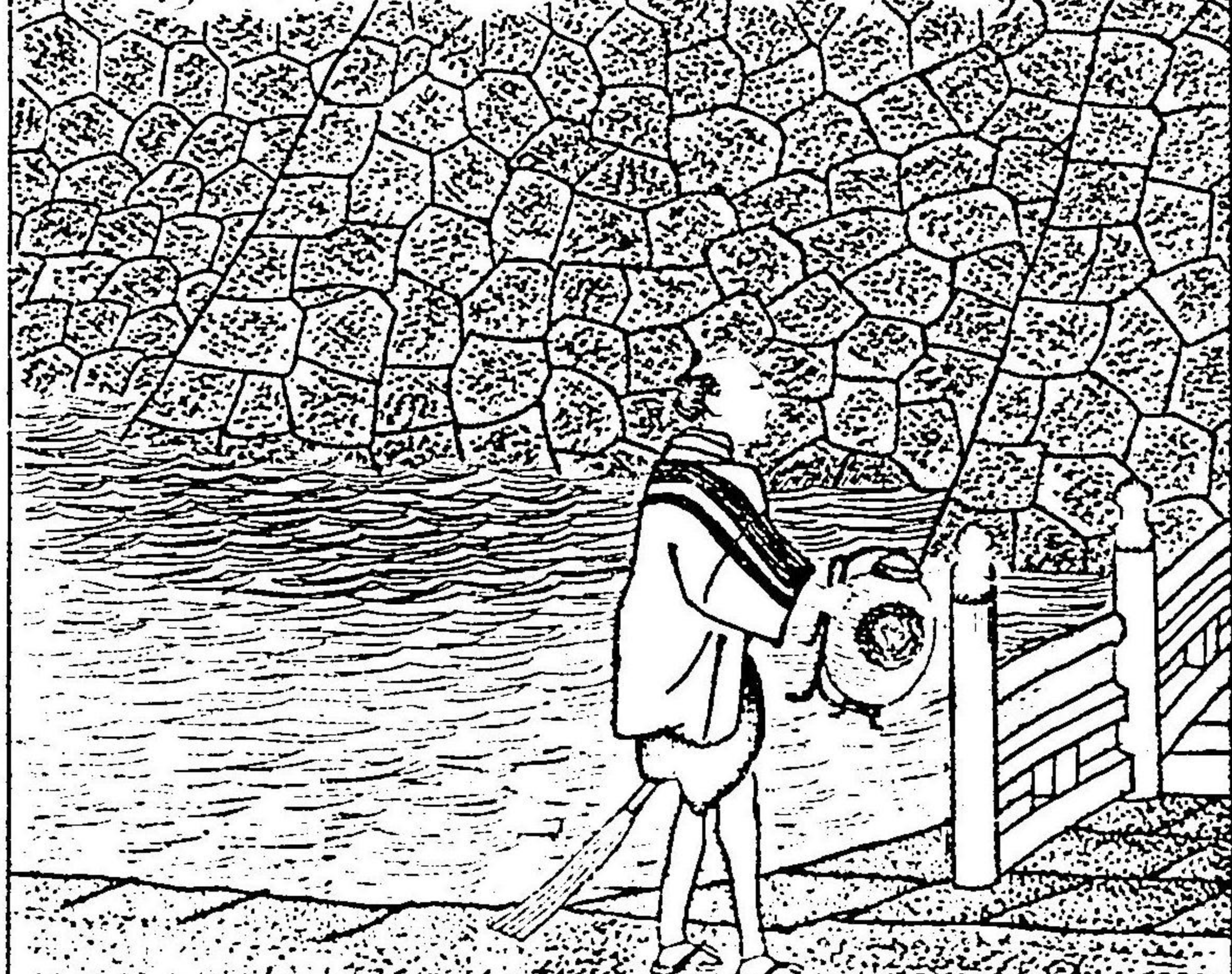
平山石主計
頭親吉
大工と太郎
もあ
め七之助
御心
も厚
賜
次



成就の時至れり其計策
△神社
の旨仰出さ
れ此由と平
山石主計頭本
多上野介聞
込兼ての望
泰詔の御起願あり
て今年寛永八年四月

宇都宮

忠長卿
の後見本
多上野介
正統の家
光公の御
代とあり
我意の
通らぬと
残念な
かひる不
いふく謀
計とあら
相役



●又御取次
ありて慶長
十二年尾張名
古屋の城主と
あり十七万石
と賜ふまうま
此度本多上野介
かゝる大事業
一種々計略とぞ
めくわしける爰は
將軍家光卿八神
君の御厚恩と忘れ
たまらぬ日光へ御

平岩主計
頭親吉
といふ
大工と太郎
勇き
もありま
ぬ七之助
て神君の
御心いれ
も厚く
三万石
賜なり
次第



成就の時至れり其計策の
御社恭
の旨仰出さ
れ此由と平
山石主計頭本
多上野介聞
込兼ての望
十二

宇都宮

守都宮

くりくりと互に手の平へ
 書いてひらき見ると存合せ
 けり大悦び忠長公へ
 内々言上し兼て用意
 あら様まさうの申
 さん上野介の忠長卿
 へ御暇とてひ駿府
 を発足し江戸へ
 来り將軍家光
 公へ拜謁し御社
 参の儀と感
 賞奉り附
 てハ宇



成り上り
 御暇とて
 駿府へ
 御社参
 拜謁し
 御社参
 拜謁し
 御社参
 拜謁し

都宮
 城御
 一宿願
 許可あり
 ければ上
 野介の大
 悦び本
 国さし
 帰城の上
 將軍家
 害をまき
 計畧と



可成り
 御社参
 拜謁し
 御社参
 拜謁し
 御社参
 拜謁し

宇治御

のやうくと互に手の平へ
 書てひらき見ると符合せ
 りがたは悦び忠長公へ
 内々言上し兼て用意
 あら様こそさうい申
 さん上野介の忠長公
 へ御暇とごい駿府
 と存足し江戸へ
 来り將軍家光
 公へ拜謁し御社
 祭の儀と感
 賞奉り附
 てハ字



●考るよ容易のことにて
 の事成るまじと器量あ
 る大工を十人候と密に言
 結申付
 成切の上
 御恩賞
 建業を
 面を随ひ
 湯殿を方一丈五構へ

都宮
 城一御
 宿願
 許可あ
 ければ上
 野介の
 悦び本
 国さ
 帰城の上
 將軍家
 害とべき
 計畧と



湯殿を方一丈五構へ
 其中は
 湯殿を方一丈五構へ
 湯殿を方一丈五構へ



浴湯の時
四方の縄と切て
落し押殺せの工とあり故は
十人の大工の普請中城内に留
置外出とゆるさむさて大工の中は

●瀬も絶て
ありが与
大郎堪へ
るて城中
を志のび
出辛くも
庄やとえ
至り久し
ふりみて
娘ふ逢ひ
釣天井の
普請の
始末



与太郎といつものあり 宇都宮近
方塩屋村といつ所の人にて美顔あり
父は同村の庄屋藤左工門といふもの
福有のりのみて敷奇屋を建てる時
与太郎不言付し其普請中
此家の娘ふ戀慕されつゝ
いふ中とありが
此がしんは付き達

此計り物語り
就成の
大の
了また

宇都宮



其の上は釣天
井と持
大磐
石を乗せ
置將軍
浴湯の時
四方の繩と切て
落し押殺もの工とあり故に
十人の大工ハ普請中城内に留
置外出とゆるさそきて大工の中

●瀬も絶て
ありが与
大郎堪へ
りて城中
そまのび
出辛くも
正やうさえ
手り久し
ふりふて
娘小逢ひ
釣天井の
普請の
始末



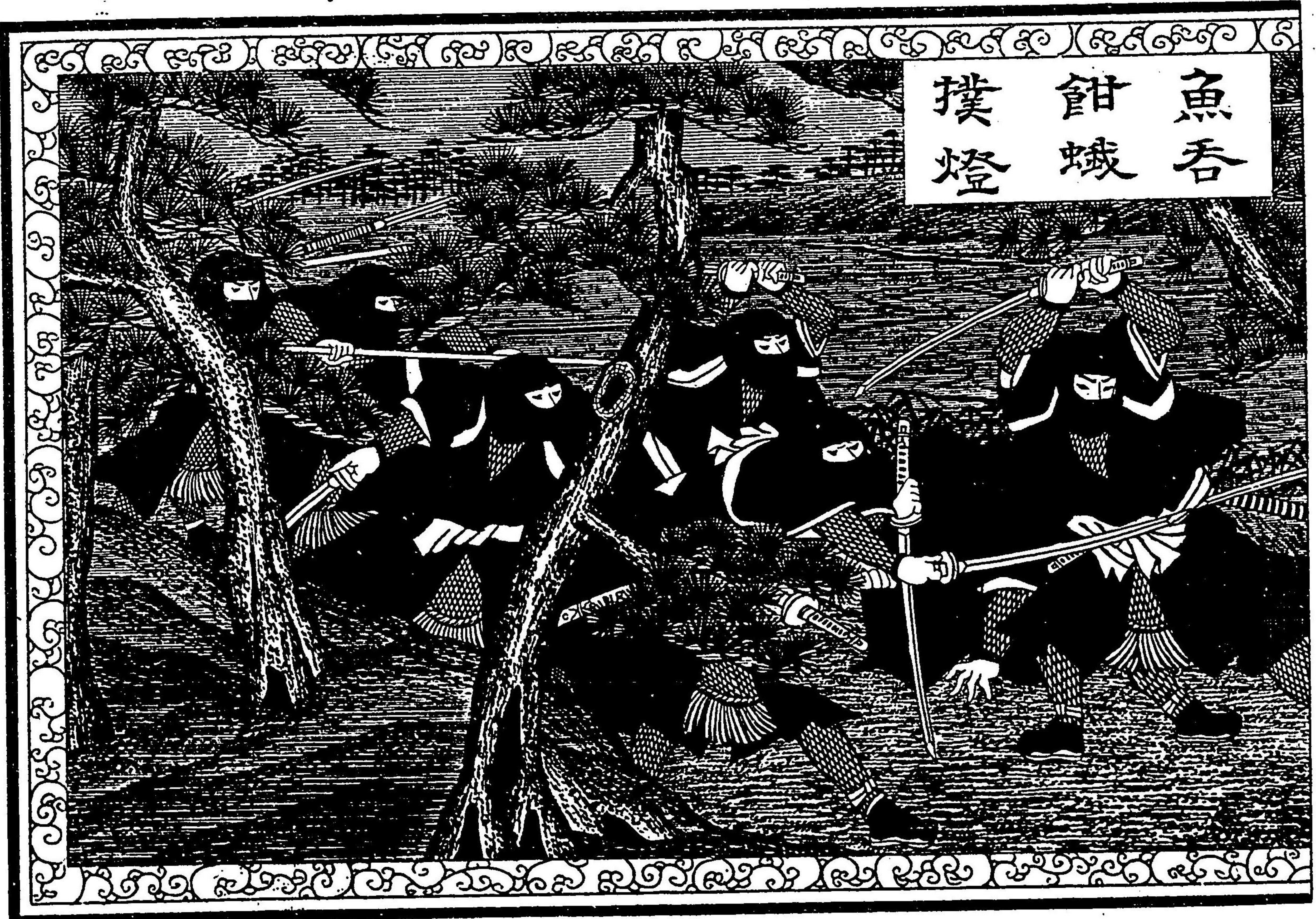
与太郎といふものあり 宇都宮近
方塩屋村といふ所の人みて美顔あり
爰は同村の庄屋に藤左工門といふもの
福有ののりみて敷寄屋を建てる時
此与太郎に言付し其普請中
此家の娘に戀慕されつゝ
こりなき中とありしが
此ふらんは付き達

物起り語り
此計り
累成
就の
上大
金
また

宇都宮



魚香 餅蟻 撲燈





あれがそのと他ハ立派
の身分とあり聲不
あろり嫉ヲ貫テ
止マアあてくさり
つくして夜明
がさつを帰リ
けり却て説
城内の名家老
川村頼負あり
の大工の
部屋と見廻
るま九人あり
で居らぬ也

いかにいかに
夜明
の
川村
の
部屋
と見
廻る
ま九
人あ
り
で居
らぬ
也



一人ハ何方へ行
哉と尋テ皆
之ハ驚きくさん
もあゝ笑ハ与太郎
事外出を望
ひ処正直りの
まゝくみて取
くらハ出遣
ひども退付帰
申シ付何卒
穏便願ひ奉
見言てあり
川村ハ少も咎め

庄屋藤左門



むねがそのと地へ立派
 の身分とあり 聲ふ
 るるり 婿は貫やう
 せやーあまごり
 つくして夜明
 ぐさるを 帰り
 けり却て説
 城内の大家老
 川村 靱負あり
 の大工の
 部屋と見廻
 るふ九人あり
 での居らぬ魚

●立去りけり夜明て
 又来り見ると十人揃
 ひ居り
 川村
 早や主
 人の前出
 この顔末と陳べけり小
 人の明てを一大事あり
 の穴より提の崩れと
 事あり速ふ十人を討捨
 べしと無さんとも討果あり
 扱も庄屋の
 娘は与太郎



一人の何方へ行
 哉と尋るる比皆
 女ハ驚きさうさんさ
 もあく実ハ与太郎
 事外出と望
 ひ処正直りのめ
 しまくして取
 くらひ出遣
 ひへども退付帰り
 申へん付何卒
 穏便に願ひ奉
 見ひ言てあり
 川村ハ少くも好めぬ

庄屋藤左門

が殺されー
 こころを叩て
 けらういあげき
 此間の穴味の



板倉内膳正





つるりの釣天井
の細工の事あど
こまぐと書置よ
残一あのせめて
添ひ遂んと自殺
せよよと親のあげき
猶書置とくり返一讀は釣天井
の一義いゆも不審あり殊ふ
將軍家御止宿との噂あれば是
一大事ありべと覺
悟と極め御先供あり
井伊掃部頭の休と所よ

外九人の大工殺
書置と始
末釣天井
井宮織
の事を
委しく
認め
書付と
差出せ
掃部頭

板倉内膳正



所よ来りち
太郎

見お
りて大
いふ事
りて備
しるも
先手
の
面々
都
一
線
於

宇都宮



將軍家光公



板倉内膳

本陣ふ来た互ふ丁寧
 同道して將軍家
 の御出迎ひ
 ふぞ出行
 二折柄
 御乗物
 由近付
 宇都宮へ
 今二里を
 歩いて着御
 の所江戸の方

宇都宮

宇都宮

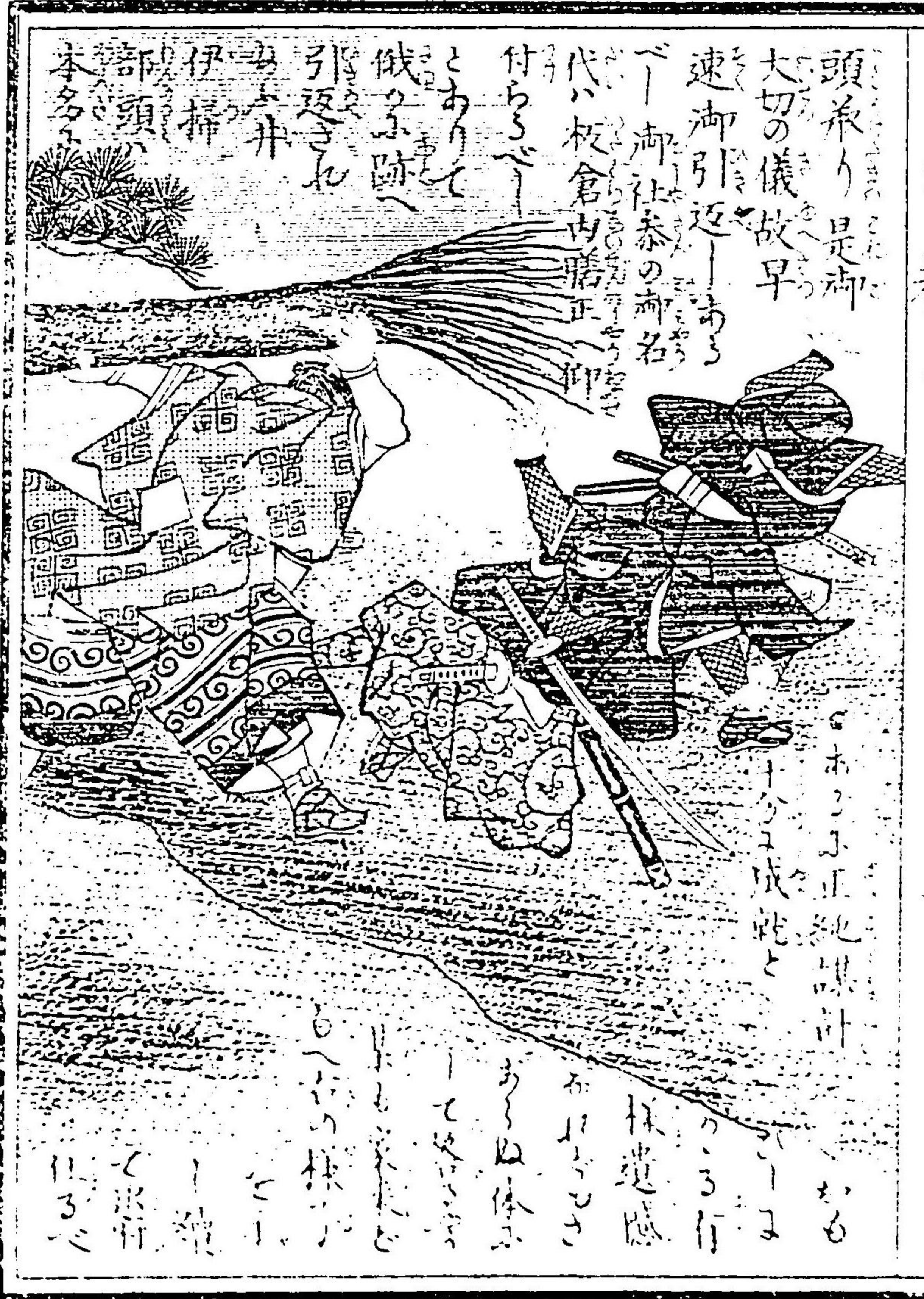


將軍家光公
上るに大御所
紀乃忠公御不御止
重らせさる御存命
且又はあり座
御引返しありべ
とありか



はろりたれ木多上野介正
純御出迎ひとして掃部頭が
本陣ふ来りてふ丁守は扶掖あり
同道して將軍家
の御出迎ひ
ふぞ出行
は折柄
御兼物
も近付
守部宮六
令二里をのり
ふして着御
の所江戸の方
校倉内膳
の騎馬馳
の早打
御老中
の書翰
内膳正重日御兼
物ふよつて足と
井伊掃部
同道ふく
御迎ひの
為め奉
上せり持
下掃部
頭を召
て布
の書
翰と
志ある

井伊掃部



頭承り是御
 大切の儀故早
 速御引返一あり
 代板倉内膳正一御
 付らさべし
 伊掃
 引返され
 伊掃
 本多

本多
 伊掃
 引返され
 伊掃
 本多

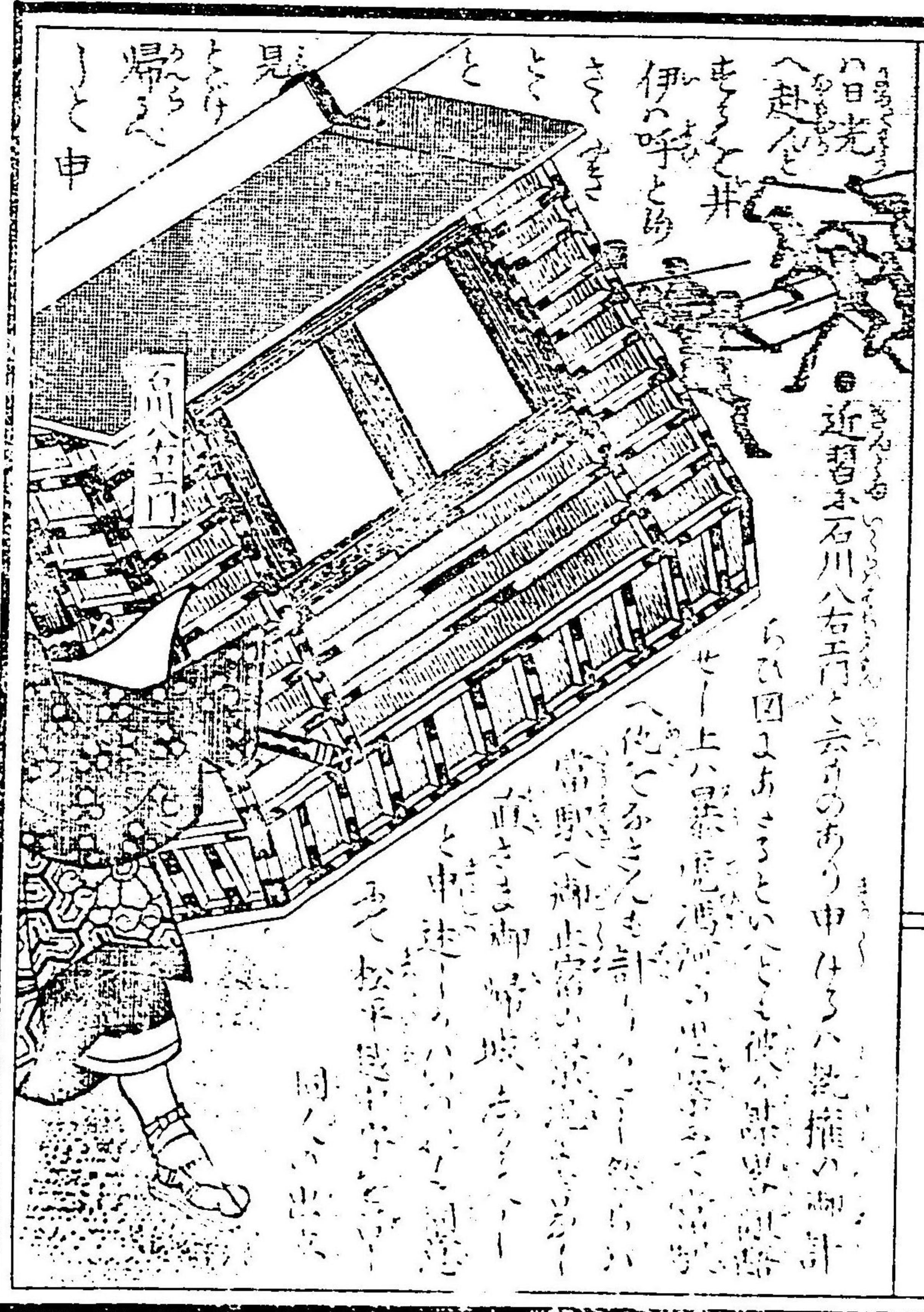


其許
 の御
 應御
 苦勞
 あり
 見聞の
 通りの次第
 多末意
 うさべし御
 將軍家光
 御供して大御
 御の御不例を伺ひありやと



石川公右衛門と云りのあり申けりハ執権の御計
 ちひ因よあこといへどの彼が謀畧詛語
 せし上ハ暴虎馮河の思案あて當駅
 へ仇とるさんも計りらる然らバ
 當駅へ御止宿の景況よ言る
 直さま御帰城志々べ
 と申述しうらぐれも同意
 こそ松平越中守を
 同人の出立







ど
の如く不取る
越中守の
将軍の
影武者

家光公

とありて
石橋宿より将軍へ越中守
が衆物にて江戸とさして夜中より
いそいでまゐりし陸尺の
精力尽して後ふつ者あり
八右衛門の追手の来りし
中しき心もあく諸人と
駈立しく急げとも一同
勞れを最早一人も

● 昇上江戸城へ到着
せり然るも大手の御
門閉れば大音まよ

石川八右衛門

将軍の還りの
あり



役
れ
八右
門
はら
さ
自
衆
の
棒
一
人
て



本多のあつたさへ返
て城の中へ
と探り明らか
り登城して本多
が結構明白か
る言上中
將軍老臣と
て本多か
企て存
あつたさへ返
張本人有下
と仰ありま

御門を閉かん
いふ夜中との不意の
事故決て閉かんれれ棄物の棒
杖とり扉と打破。裁ひあれ御
番の大いお驚きなるの乱暴あるは錢
死せ打果すべと申さるは夫の
將軍御怪我ありて大變ありとて裏
御門へ廻り漸く將軍御城へ入御ありて御家
門方へ拜謁を給り井伊がさういふと
夫々御物語あり却て説板倉内膳正
日光への御名代と尋め帰り道宇都
宮へ至り本多不面會あり同伴出府と申



評議あり
保彦左
工門の御前小進にて
申す家光八御家
以前
長卿
の御家
と



本多上野介

三



御隣 怒られ爰は字
 味ありけりふ釣天
 井の工も明白川
 村報真白状の上檢
 査ありて大工と殺
 一も同人のとら
 ぬのあゝ事よの
 罪なれば縛り首
 打られ又駿河
 殿後見平右主計頭
 も北村 橋ある中付江戸へ見
 丸名小逢事必定ありと自
 認し相果さう我駿河殿の



本多の申
 其罪明白あり
 其根木と防
 謀反相
 連る

賜りぬることを其大の御
 都野宮の城中と御吟味ありけり

井の工も明白川
 村報負白状の上檢
 査ありて大工を殺
 せりも同人のそ
 ららぬ事
 罪ありは婿り首
 殿後見平右衛門
 も荷擔あり小付江戸
 殺し相果り叔駿河殿の



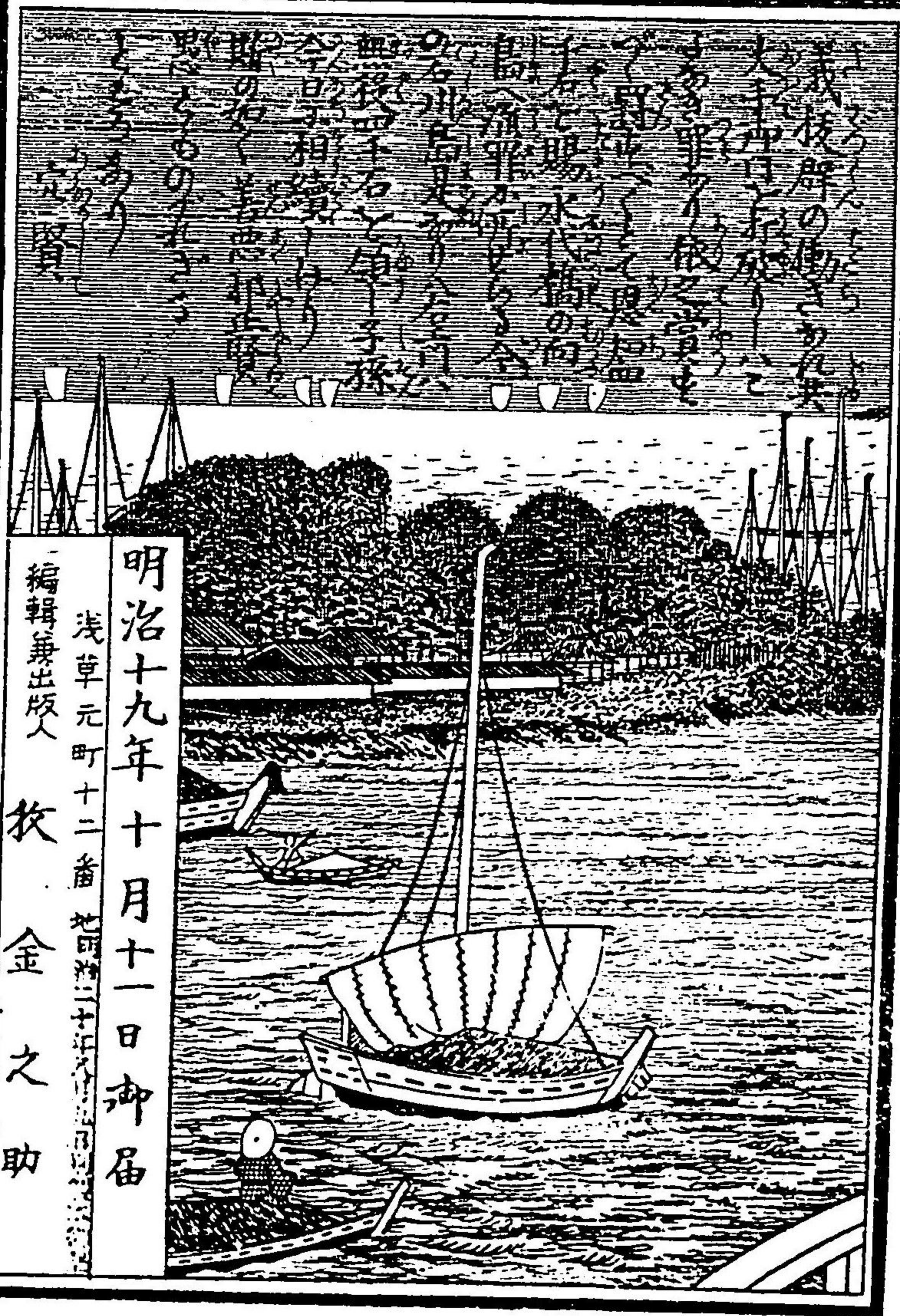
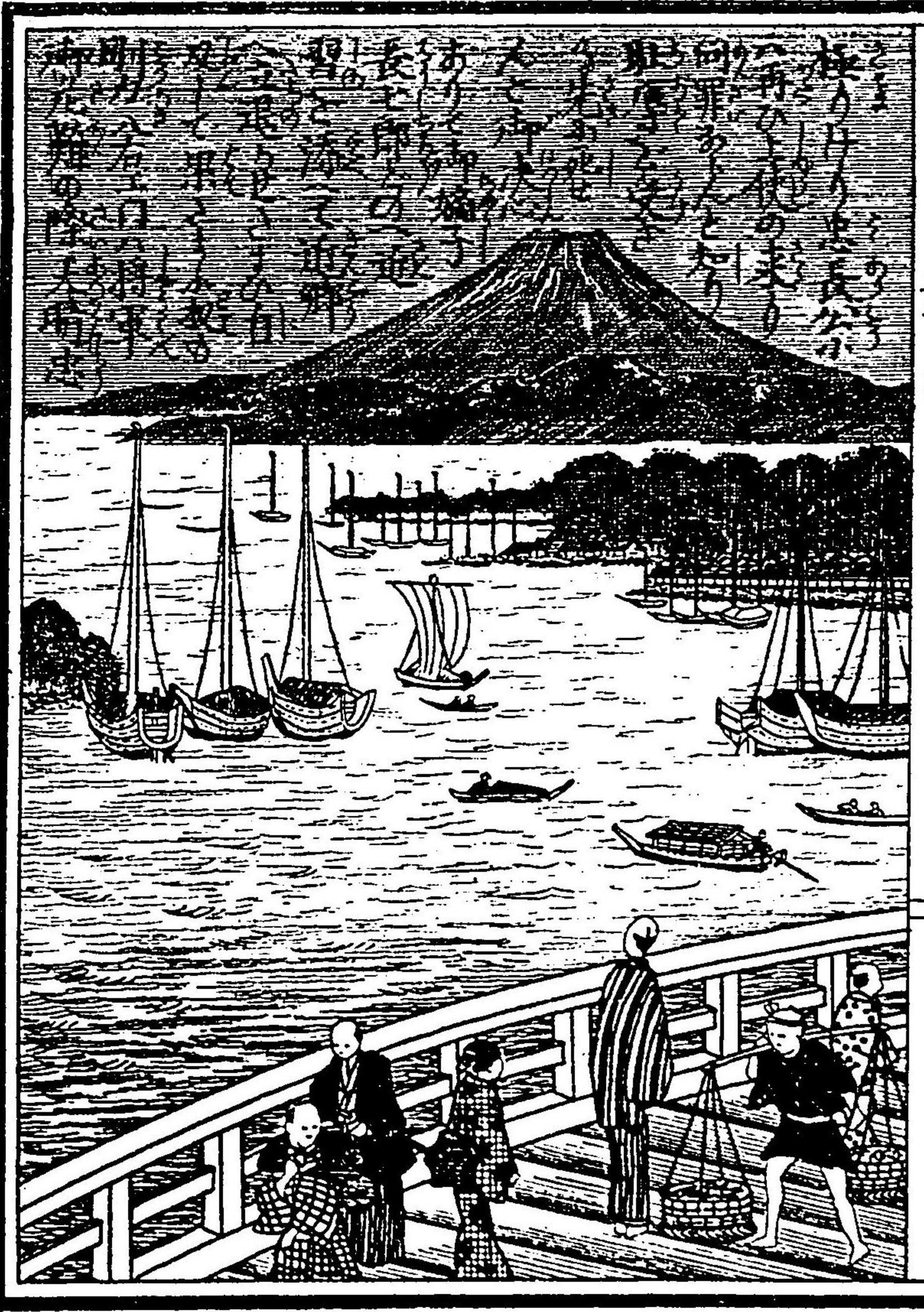
事あり羽
 州山縣の
 城主鳥居左
 京其忠恒
 御同人は
 組未

本多と縁者
 在明白ありと
 申せし鳥居
 伊掃部頭と
 老中達か夫
 々討手捕縛
 の手配ありて何
 れも伏罪あり

本多上野介
 御謀反判然
 あり其罪
 状を數
 解官ホ
 の病と
 りひ
 みせら
 る下
 既駿
 河上
 使御差
 立不相成
 御評

鳥居忠恒の大名御
 御評

宇都宮



明治十九年十月十一日御届
 浅草元町十二番地
 編輯兼出版人 牧金之助

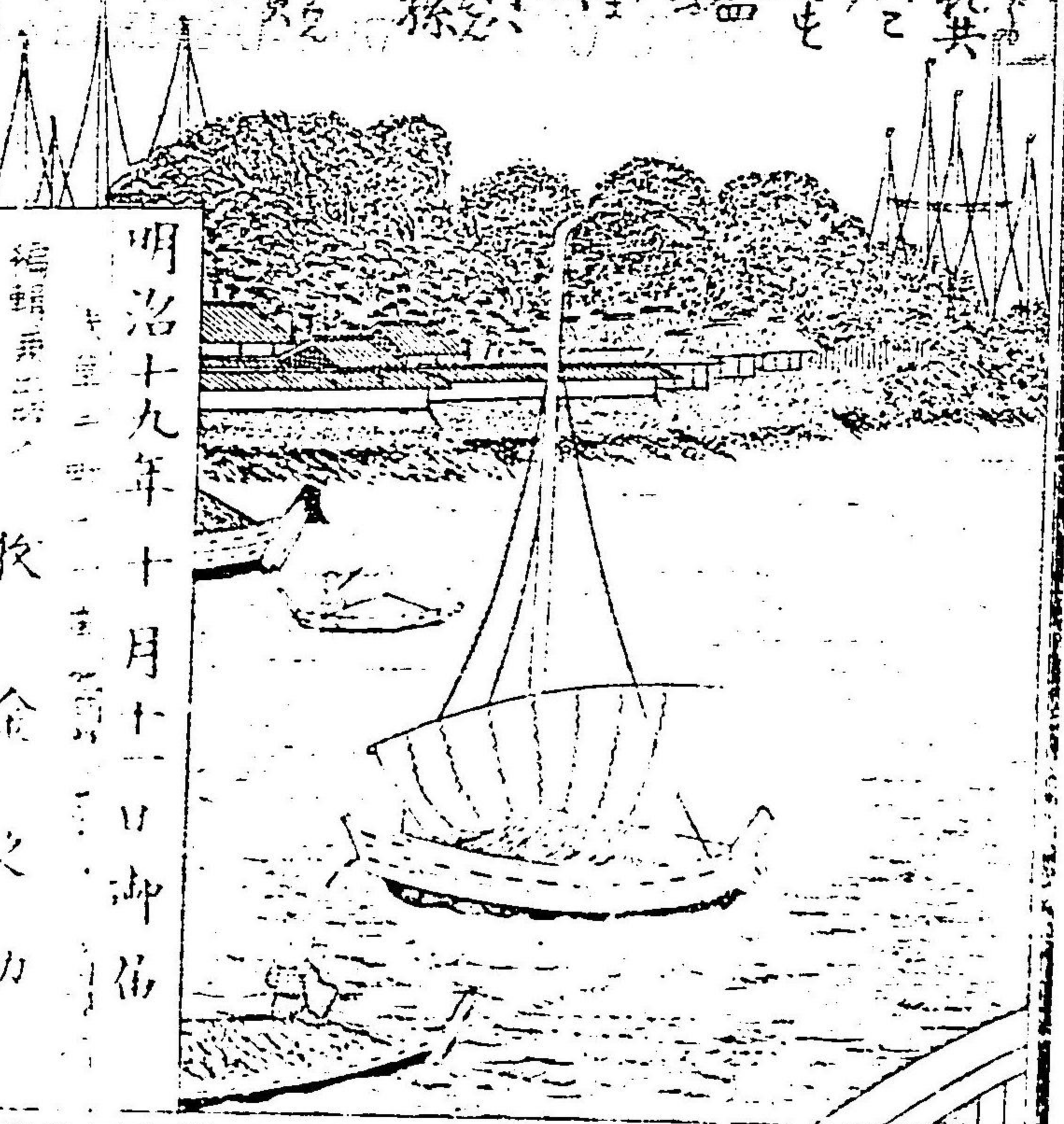
定價廿五錢

宇都宮

極りけり忠長公の
 へ再び上使の来り
 向罪ある人と知り
 耻辱を受きたる
 先公の死
 んと神決心
 ありて御嫡子
 長七郎の近
 習を添へて近郷
 へ立退りせよまひ自
 死して果さまふ教の
 剛力八右衛門の將軍
 御危難の際天晴忠



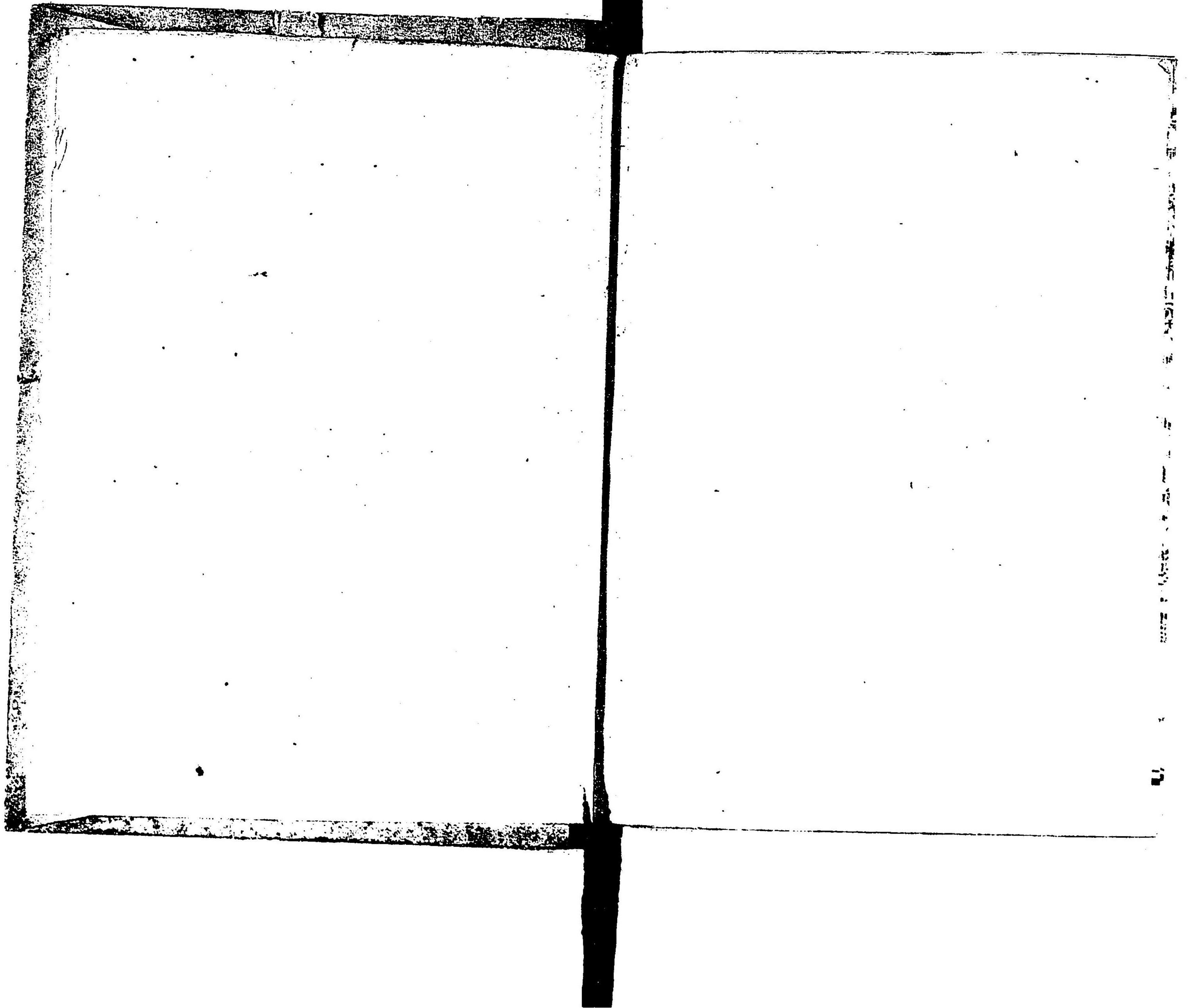
義枝群の働きたれ共
 大手御門と打破りて
 ありて罪あり依之賞も
 べし討せむとて恩知
 千右と賜水代橋の向
 島へ流罪の所せらる今
 の石川島是あり八右衛門
 無後四子石と領子孫
 今口か相續しけり
 斯の如く善悪邪正賢
 愚とのすれざら
 とらあり

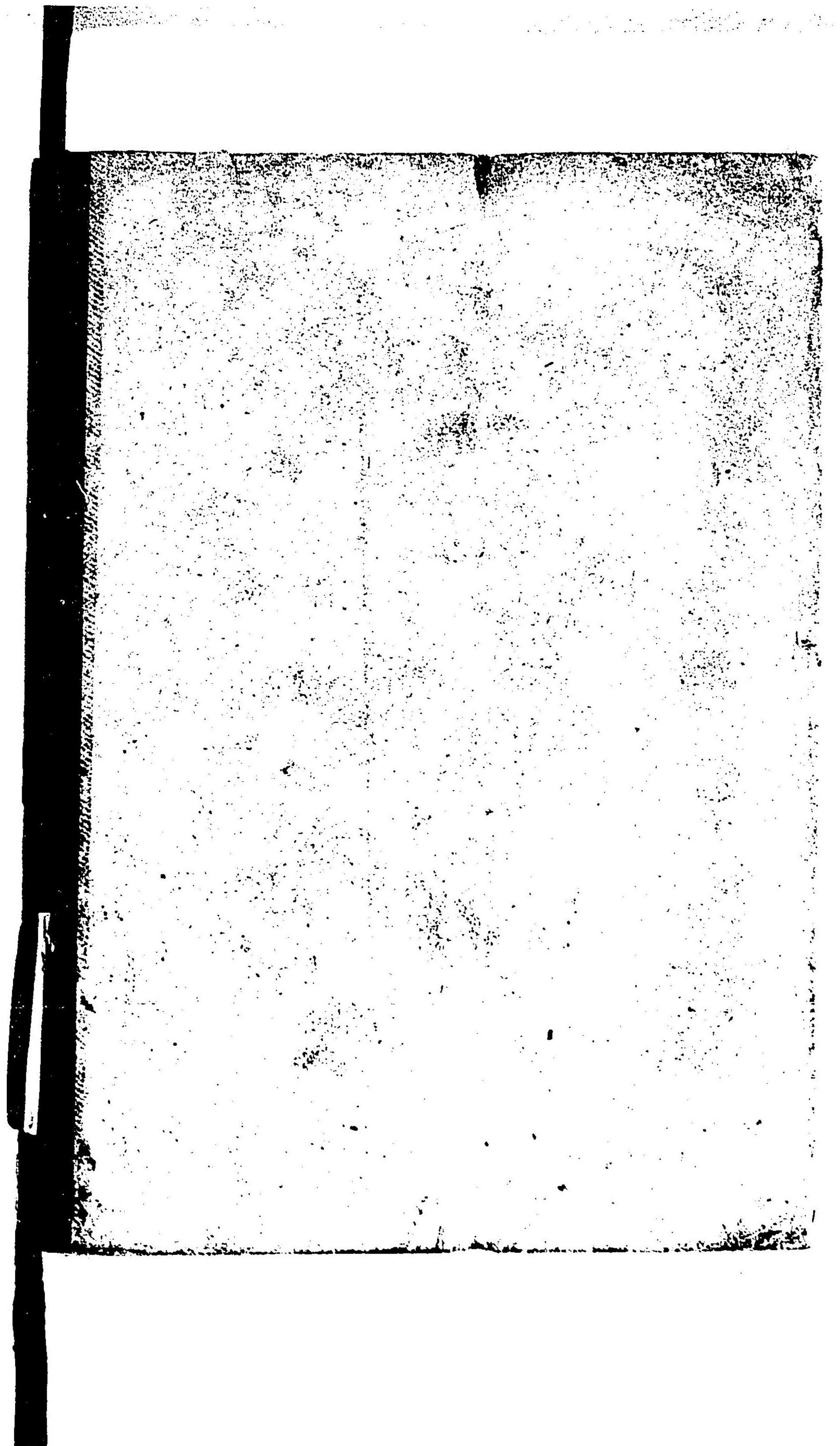


明治十九年十月十一日御節

編輯員三郎 校 金 之 助

穴賢





27
2
87

繪本
實錄
宇都宮釣天井

金壽堂藏本

091939-000-5

特64-544

宇都宮釣天井

牧 金之助 / 編

M19

DBP-0053

